



第 21 号
1999 年 10 月

TOGETHER FOR A FAIRER WORLD

FAIR TRADE

ネパリ・バザーロ だより



ベルダレルネーヨ通信

ネパリ・バザーロは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取り組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ(NGO)であるベルダレルネーヨ(ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会)のトレード部門として1992年から活動しています。1998年2月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。



特集

フェアトレードの現場とその思いシリーズ その1

①「有機栽培紅茶との出会い」 p.2

生産者を訪ねてシリーズ その8

②「ウールンガーデン」手編のセーターは宝物... p.5

| | | |
|-----------|------|------|
| ネパール滞在記 | 戒能恵子 | p.8 |
| 海外事情 | | p.9 |
| サラダさん講演会 | | p.10 |
| 新人紹介 | 福井千陽 | p.11 |
| お知らせ・編集後記 | | p.12 |

表紙絵:「ボカラからマチャプチャレを背に見るペワ湖」ラジュ・ムニ・バジュラチャーリヤさん画

有機栽培紅茶との出会い



ハンディクラフトでお付き合い頂いている現地NGO、サナ・ハスタカラで有機栽培紅茶を扱っていることは知っていました。その紅茶の提供元が、カンチャンジャンガ紅茶農園と知ったのが1996年。販売不振で困っていて、私達とは直接のお付合いを希望していました。そこで、1997年5月にネパリー・バザー口内に紅茶輸入プロジェクトを立ち上げました。

紅茶を輸入した動機

紅茶、コーヒー農園の歴史を振り返ると、砂糖農園のように奴隷なしではやっていけなかった時代があります。ネパールで栽培が始められたのはずーっと後であるにせよ、農園労働者は弱い立場になりやすいだろうと考えました。そこで、できるかぎり生



カンチャンジャンガ紅茶農園での茶摘み風景

産者に近い立場で始めようとしたのです。ネパールのコーヒーを政府の輸出許可第1号として始めたのが1994年、その経験を生かしての紅茶輸入のスタートでした。

ディリー・バスコダさんとの出会い

その後、実際にはコーヒーの輸入に手間があまりにもかかり、なかなか紅茶輸入まで手が回りませんでした。私たちの限られた力量では優先順位を付けざるを得なかったのです。ネパールの村々に広がるコーヒーの場合は、訪問地域も広いし、数年後の生産量と市場の動向なども考慮しながら進める必要があるし、将来に向けての有機栽培証明準備や、2年後に迫る米国のHACCPという食料安全基準への準備もあり、様々な関係機関と話しあいながら一步一步進めなければならないので時間がかかりました。

このような時、もっとも適切なアドバイスを提供してくれたのが、カンチャンジャンガ紅茶農園カトマンズ事務所のディリー・バスコダさんでした。コーヒーと紅茶は密接な繋がりがあるからです。定期的に関われる半官半民のコーヒーと紅茶の委員会があります。ディリーさんは、そこに生産者として出席し、各地域の農民、協会、販売会

ネパールの紅茶の歴史

お茶の歴史は、中国、日本で親しまれている緑茶に遡ります。西洋でも以前は緑茶しか知られていませんでしたが、17世紀にはイギリスで紅茶を飲むようになり、インドで栽培が始められたのは1830年代のことです。

ネパールでは、1910年頃、ネパール極東部のイラムで2つの紅茶農場が作られたのが、紅茶生産の始まりです。両農場とも後に国営化され、今では1977年に設立された国営紅茶開発協会(NTDC)によって運営されています。生産地域も増え、ジャバ、イラム、パンチタール、テラタ、ダンクタの東部の5地域は、政府によって「ティー・ゾー

ン」とされています。

年とともにネパールの紅茶産業は着実に成長し、現在では年間生産量が1,000トンを超えるまでになりました。このネパール産の紅茶は、香り高いことで海外に知られており、主にアメリカ、日本、ドイツ、カナダなどの国々へ輸出されています。





紅茶コーヒークomiteeにて。左から3人目がディリーさん

社の代表者と共に、農民から買い上げる価格や、市場動向とその問題点を話し合っています。私達も、この委員会と定期的に情報交換をしたり、課題解決に向けて話し合いをしたりしています。こうして、現地の状況改善に向けて現地視察を委員会の会長やディリーさんと共同で行う計画もしています。最近では、ネパール商工会議所とも話し合いを始めました。このようなきっかけはディリーさんとの出会いからです。このようにして、信頼関係を築きながらゆっくりと紅茶の輸入は進められています。

率先して行くことの重要性

第3世界といわれる国の政策がうまく行かない理由の一つに、国全体の将来に向けて率先して道を切り開いて行く人がいない(イニシアティブを取る人がいない)という現実があります。ですから、ある程度、イニシアティブを取る労力が必要

で、これは時間がかかりますが、フェアトレードの活動として避けて通れない促進活動だと思っています。

カンチャンジャンガ紅茶農園

カンチャンジャンガ紅茶農園は、首都カトマンズから遠く離れた東ネパールのパンチタールという丘の多い地域にあります。インドのダージリンの隣、ネパールのイラム地域とも隣どうしです。世界的にもっとも美味しい紅茶ができる地域です。

この農園は、協同組合的組織で農家の人々自身の力により1984年に始められました。100を超える農家が手を取り合い、自分達の土地を出し合っ



<紅茶の新しい葉>

お茶の種類とグレード

一口に紅茶といっても、茶葉の種類にはバラエティーがあり、また産地、農園、収穫年によっても味や品質が異なってきます。

「グレード」では「リーフ(茶葉)」と「ブロークン(碎茶)」に分けられ、茶名の後についているTGFOPなどの記号による分け方がありますが、これは葉の大きさや形状による紅茶の分類であり、品質とは無関係です。

ネパリー・バザー口で扱う紅茶は、

格別の香りをもつダージリンの仲間、イラム紅茶(パンチタール地域)です。中でも4月から5月にかけて摘まれる「ファーストフラッシュ(一番摘み)」が主で、これは水色はオレンジ系で淡いですが、若々しい春の香りで、ストレート・ティーに適しています。

5月から6月に摘まれる「セカンドフラッシュ」は、幾分濃いめの水色になり、味はやや渋みが増し、フルーティーな香りのお茶になります。

さな農家がやせた大地でも有機手法で紅茶や他の穀物を育てることができるという農業改善の良い動機付けともなっています。

有機栽培の紅茶って？牛糞？

有機栽培紅茶は、環境にやさしく配慮された紅茶農園作りを目指したもので、肥料や殺虫などの自然な手法を用いて実現して行くものです。それにより、大自然のリサイクル循環に従って行くことが可能となり、安全な食品、働く人々の健康を守るだけでなく、環境にもやさしくなることを意味しています。

たとえば、各家庭で飼われている牛糞は、ワラとこねて日干しをして堆肥にし、5月から10月の間に集められます。有機に取り組んでいる農家を訪ねると、子どもたちが牛糞作りのお手伝いをして、周りでヒヨコが遊んでいる姿を目にしたことがあります。ヒヨコは、ミミズがいるので、近寄って来るのです。それだけ、土にとって良いのでしょう。その他、鳥糞、ジャングルから集めた葉も使われます。こうして、土壌の改善がなされていきます。また、野生のイラクサから取れる液体は、アザミウマやアブラ虫に有効な自然の防虫剤となります。



NASAA の
有機栽培証明書
毎年検査官が現
地を訪れ、検査
を行っている



食料安全基準への動き

この農園が提供するヒマラヤンワールド紅茶は、1998年にオーストラリアの有機農業の証明機関NASAA(The national association for sustainable agriculture, AUSTRALIA Ltd.)の認可を受けています。更に、米国のNASA(航空宇宙局)が宇宙飛行士の食品の安全性を確保するために始められて、広く食品工場に導入されるようになってきたHACCP(Hazard Analysis Critical Point)という食品衛生管理の準備をしています。

農園の果す役割

このようにして出来あがってきた農園は、現在、この地域ではどのように役立っているのでしょうか。この地域で収穫された紅茶をイギリス、ドイツ、ノルウェーのフェアトレード団体と日本のネバリ・バザーに販売した収益をもとに、歩道、橋を作ったり、生活施設を作ったり、医療施設を作るなどの環境整備に役立っています。更に、ローンの提供や、学費援助などにも役立っています。

ここの紅茶の輸出の多くは、紅茶を飲む習慣のヨーロッパの国々と私達に直接顔が見える状態で出荷されています。従って、消費者の方々と生産者の方々が、立場は違ってもお互いに共存共栄している状態です。お互いの生活に役立っていることを実感しています。

| | | |
|-------------|------|-------|
| 商品情報：織り布袋入り | 50g | 450 円 |
| 手漉き紙袋入り | 100g | 800 円 |
| 木箱入り | 100g | 900 円 |

茶摘み女性の一日

ネパールの東部、世界で3番目に高い山「カンチェンジュンガ」の麓には、青々としたお茶畑が広がっている。

ここでお茶摘みとして働いているサラスワティ・グルンは、快活な女性。彼女は、朝8時からドコ(背負いかゴ)を担ぎ、深いお茶の木の茂みに入り、器用に注意深くお茶の葉を摘む。熟練している彼女の指は、ほとんど機械的に確実に緑の葉を摘み、背中のドコに入れる。一番重要なのは、細心の注意を払って、お茶の葉を傷めないように扱うことだ。途中、お昼には自分の家から持ってきたお弁当を仲間たちと一緒に食べ、世間話に花を咲か

せる。

午後2時頃、サラスワティはお茶畑に戻り、もう3時間摘み取りを続ける。太陽はゆっくりとゆるやかな丘に姿を隠し、女性たちは再び集まる。

茶葉はその後5 - 7時間出荷される形態に加工される。このお茶がサラスワティの口に入ることはないが、どこかの国の人々がこの紅茶を楽しんでいることを彼女は知っている。

参考：「シャングリラ」

「お茶とハーブティー」ジル・ノーマン著 同朋舎出版
「紅茶の楽しみ方」小池滋 荒木安正 他 新潮社



ウールンガーデン

--- 手編のセーターは宝物 ---

土屋 春代

出合い

毎年セーターの時期になると頭が痛くなった。重くて嵩張るセーターを何百枚も目の前にして呆然としていた。冬に売るものといえばセーターぐらいしかなかった頃。お客様によく言われたのは、手編で手が込んでいてすごいけど...重いよね~、暖かくていいけど...重くなければね~、いいわね、素敵ね~でも肩が凝りそう、等等。生産者に軽い糸がないか、軽く作れないかといくら言っても「これで他の国には売れているから」でも日本は軽くなければダメなのよ、「ウールは重い方が上等」そう言ってみたけれど効果なかったわ、「速く編めるから」なるほどね、でも売れなければ在庫が溜まるだけ、来年は仕事がなくなるかもよ。

4年前ウールンガーデンの店先で軽いセーターを見つけた時、あるじゃない、作れるじゃない、と飛び上がるほどうれしかったのだ。

技術を覚えて

ウールンガーデンはマティナさん（29才）という女性が14年前に始めた。その頃彼女は世界銀行が資金を出してイギリスから専門家を招いて手編技術の講習会を開いた時に指導を受けた。その後仕事として取り組むようになり一緒に指導を受けた近所の女性達にも依頼しながら続け、仕事が増えるに従い兄弟姉妹も手伝い、役所を退職した父親も手伝うようになり発展してきた。今では140人ほどの編み手を抱え店もカトマンズとパタンに2店営業するまでになった。編み手の女性達はそれぞれの家で家事、育児の合間に仕事をし、パタンの店の2階、3階の小さな工場では新しいデザインを指導したり、ウールを染めて糸を配分したり、ボタン付けや仕上げ検品など最終行程をしている。



右手前がマティナさん

力を合わせて

冬が来てセーターを販売している頃、すでに次の冬のセーターをデザインする。

手紡ぎの撚りの粗い糸の風合いが活きるような、根気のいる細かい柄を鮮やかに編む人たちの技術が光るようなデザインを考えなければとプレッシャーが掛かる。機械では出せない味のある手編ならではのセーターをデザインして編む人たちの努力が報われるように、と考える。

街にでて行き交う人々の着ているものを見る、参考になりそうなものを着ている人を見るとついジロジロと見てしまう。後ろに回ったり横から見たりとウロウロする。目つきの悪いヘンなやつ、と思われそうだ。ようやくいくつかの案が浮かぶとデザイン画を描き色を入れていく。1月に出張した時にマティナさんたちと編み方の打合せをする。

編み込み模様の色の組み合わせは色番号を指定した表を渡して10センチ四方ぐらいの大きさと15種類前後編んでもらう。ほんの少し色を変えただけで印象がガラッと変わるのでこれはとても重要だ。組み合わせを絞り込んだ後デザインの基本は同じで少しづつ変化させたセーターを5種類ぐらいそれぞれ地色も3、4色変えて編んでもらいスタッフ全員で選ぶ。4月の出張の時最終決定に向け細かい微調整をするがこれは編む人の手間が掛かり一番大変な作業だ。

完成に近付けば近付くほど細かい欠点が見えてくる。もういいか、もう我慢しようかとこちらが

弟の店に住み込んで手伝いをしながら学校に行き12才の娘さんと二人暮らしだ。チョリさんは仕事がたくさんあると張りきるといふ働き者だ。一緒に工場で仕事をする人達の冗談に耳を傾けながら楽しそうに働いている。

チャンドラ・クマリさん (58 才)

ウールンガーデンの編み手の中で最年長がチャンドラさん。マティナさんと講習を受けて以来一緒に仕事をしている最も古いメンバーでもある。

9年前夫を亡くし息子2人娘3人を育て、現在は長男家族と共に住む。7人家族で生活が厳しく朝4時頃から編み始める時もあるという。起きるなり針を持ち夜寝るまで編むよ、と笑う。独身の長女ニルマラさん(26才)と一日中せっせと編み針を動かしている。

2人で一月に30枚ぐらい編み、平均月収1万ルピーぐらいだという。直接の報酬だけでなく長男が学校へ行っていた一番苦しい時マティナさんの兄でウールンガーデンを取り仕切っているバスカルさんが学資を9年間支援したという。チャンドラさんは大きな家族と言われるウールンガーデンの中で守られ敬愛されている。



セーターをチェックするチョリさん(右側)



娘さんと共に自宅でセーターを編むチャンドラさん

कालिन्चोक ट्रेडिंग कं.
Kalinchowk Trading Co.

JHAKAL TOILE
P. O. BOX 1765
KATHMANDU NEPAL
TEL: 2-21812
TELEX: 2488 KTC NP
FAX: 1-222915
CABLE: KALC

28th October, 1998

KALINCHOWK TRADING CO.
P.O. BOX 1765 KATHMANDU
TELEX 2488 KTC NP
TEL: 221812, FAX: 1-222915

Clariant



TO WHOMSOEVER IT MY CONCERN

This is to certify that we are the indenting agent of M/S. Clariant (Switzerland) Ltd., Muttenz, Switzerland for Nepal and that we confirm "M/S. Woolen Garden", Thamel, Kathmandu is regularly using our "Free of Prohibited Azo and Metal Free Woolen Dyestuffs".

All our dyestuffs, meet the eco-label requirements with respect to aromatic amines set by the German Federal Consumer Articles Ordinance. Dated 15th July, 1994.

Yours faithfully,
for: Kalinchowk Trading Co.

M. Thapa
(General Manager)

アゾを使用し
ていない染料
の証明

M/S. CLARIANT (SWITZERLAND) LIMITED,
ROTHAUSSTRASSE - 61
CH - 4132 MUTTENZ - 1
SWITZERLAND
TEL.: 0041 - 61 - 4697515
FAX: 0041 - 61 - 4697244

* 1: アゾ染料

アゾ化合物のあるものは染料として用いられるものが多い。それらをアゾ染料という。特長としては、低温で、しかも硬水でも安定した染色が可能で、価格も安く広く使われている。染料の70%はアゾ染料といわれている。

このアゾ染料のうちのある種のは、ドイツでは、発ガン性があるとして、人間の肌に直接触れる物へ染料として使用するのを禁止している。日本でも、研究発表レベルでは、河川などに流れて還元などの処理過程で発ガン性物質を作り出すことがあると示唆されている。(アゾ染料全てに発ガン性があるわけではないので、注意して下さい。)

10 年来の夢を実現させて現地へ

10 年来の夢を実現させて、定年退職後、カトマンズに住んでいます。何をしているかと言えば、語学学校に通うことを中心に、自宅で洋裁を教えたり、パタンにある NGO、マハグティ（通信 16 号参照）で、ネバリ・バザールからの注文品（ブラウスやワンピースに限定）の製品チェックをするのも、仕事の一つです。

語学を学びながら、縫製の技術指導

--- あまりにも重いミシンに驚いて ---

マハグティの縫製棟では、約 25 名の女性が働いています。ある朝ワンピースを手にとると、しっとりと湿っています。前夜の雨が吹き込んでミシンも布地も濡らしてしまったのでした。冬は寒く夏は暑い作業室で、彼女たちは 30 分の昼休みも惜しんで、ミシンを踏みます。ジャンジャンジャンジャンすごい勢いで縫い進めるので、ラインが曲がったりはずれたりするのも当然です。早速「もう少しゆっくりと丁寧に」と注意にいきました。

でも自分で実際に踏んでみて、よく分かりました。ゆっくり踏むと、ミシンはピタリと止ってしまってテコでも動いてくれません。力まかせに踏み続けるしかないのです。このような悪条件のもとで、たくましく、そして心やさしい女性たちです。私にも「やせたようだけど、大丈夫？」と声をかけてくれます。



自宅で洋裁教室を楽しむ戒能さん
（中央）と、その生徒さん達

自宅で洋裁教室

自宅での洋裁教室の目的は、デザイン画の読解力を身につけること、また丁寧な洋服作りを知ってもらうことです。

カトマンズでもこの数年雨後のタケノコのようにブティックが軒を並べるようになりました。外国人にとってはさみしいことですが、ネパールも急速に洋装化の波をかぶることでしょう。働く場の少ない女性たちでも、しっかりした技術を身につけさえすれば、自立の道は拓かれるのではないかと考えるからです。

教室には、マハグティで働いている人たち 4 人が通ってきています。まず各々のサイズの原型をおこし、日本のデザイン雑誌から好みのデザインを選んでパターンを作りました。直角という言葉がない（？）ネパールですので、正確な線を引くことの大切さを分かってもらうことから始めねばなりません。2ヶ月かかってようやくワンピース 1 着を仕上げて、先日記念撮影をしました。

でも実際は、彼女たちに度々助けてもらう場面がありました。毎日縫製にたずさわっている人たちですから、私よりもむしろ経験が豊富です。カッティングや手順など必要な時には、喜んで彼女たちの指示を仰ぎました。

雨季は体に良い？

通いなれたネパールですが、雨季を過ごすのは初めてなので、少々不安でした。ネパール人に言わせると、この時期の雨は体にいいのだそうで、濡れることをいといません。でも近年の排気ガスをたっぷり含んだ雨はどうなのでしょう。

朝は晴れていても、昼過ぎには一転にわかにかき曇って空が真っ黒になったと思うと、ドシャ降りがいつとき続きます。夕刻にあがってもまた一晩中降り続くという毎日です。

その雨上がりの気持ちのいいこと。雨雲を追い散らすように広がっていく青い空。これまた大急ぎで立ち昇っていく山沿いの白い雲。色も形も次々と変化していったあたかも天空のドラマを見ているよう。そんな夕方は、ご近所の人たちも家の前や屋上に出て、おしゃべりを楽しんでいます。

今年は雨季入りが一ヶ月遅れたたらくしく、田植えの時期なのでお百姓さんは大分やきもきしたよ

うです。カトマンズもちょっと郊外に出ると田園が広がっていて、田植え風景がかつての日本で見たのと全く同じなのです。つい立ち止まって見入っていたら、通りすがりの人がいろいろ説明してくれました。半分も分からなかったけど。雨季もなかなか捨てたものではありません。

テンプーの中は助け合い

さて、通勤の様子はどうかというと、先に紹介した仕事場、マハグティにはテンプーを乗りついで通っています。オート三輪に幌をかけたただけのもので、10人も乗れば満杯です。膝をつきあわせた状態ですが、片道20円ですから文句は言えません。子どもは無料なので混んでくると席を立たねばならないのに、その隙間もない。そんな時は、隣のおじさん、おばさんがヒョイと自分の膝に抱き上げます。子どもの方もむずかりもせず当然のごとく抱かれています。日頃協力しあうことが苦手とい

われているネパール人ですが、いえいえどういたしまして。庶民の足テンプーの中では、なかなか和やかな場面が展開されているのです。

夕方のラッシュ時には、集金係りが出入口の足踏み台に立ちます。大抵10才前後の若い男の子たちです。学校にも行っていないであろうのに、テキパキと釣銭を渡していきます。

私が手間取っていると(お札が汚いのため判りにくい)心配そうに手元を見えています。サンキューと言って手渡すと、ニコッと笑ってくれます。それが、思わず、どうぞ健やかに育って欲しいと祈らずにはおられないような笑顔なのです。

先日も、ほとんど裸に近い体を真っ白に塗った修行僧が髻髪をなびかせてテンプーに負けじと自転車を走らせているのを見かけました。余程の急用だったのでしょうか、いつもは静かな立ち居振舞いの修行僧の力走ぶりに、テンプーの中は笑いに包まれていました。てな具合で、カトマンズ生活を楽しんでいます。

--- 海外事情 ---

NEWS! : デイグニティ 生産者の人間性を尊重



フェアトレードの組織化は、ヨーロッパを中心に動いていますが、その代表的存在、13ヶ国15団体が構成されているヨーロッパ世界ショップ・ネットワーク、NEWS! (NETWORK OF EUROPEAN WORLDSHOPS) は、その2年間の活動結果をまとめて公表しました。現在、約2,500店舗が加盟しています。今年の5月8日のフェアトレード・デイは、このNEWS! によるものです。NEWS! では、EUROPEAN WORLD SHOP 痴 DAY と呼ばれ、毎年、5月の第1週に行われることになっています。デイグニティという標語は、1997年のフェアトレード・デイに使われ、それは、一見華やかな衣服の国際企業であまりにも不公平な状況においやられている労働者に焦点をあてたキャンペーンでした。

IFAT: 小規模生産者と歩む道を模索

フェアトレードの生産者と販売者からなる世界的組織であるIFAT (INTERNATIONAL FEDERATION OF ALTERNATIVE TRADE) は、この5月にイタリアのミラノで世界会議を開きました。

生産者にしても販売者にしても、販売するものがフェアトレード商品と一見してわかれば、販売がしやすいと考えています。IFATとしても、そのために、数年をかけてそのラベル表示、認定基準の検討をして来ましたが、しかし、私達の最終目標は、力のない生産者と協力し合いながら、品質を改善し、自立を果たして行くことのはずです。認定のための評価は、小生産者を締め出すというパラドックスを含んでいることを感じて、如何にその基準のよりどころを置くかを話合った会議でもありました。



フェアトレード講座報告「始めよう国際協力」

国際協力に関心は
あるけれど、
何ができるのだろう？

先進国と途上国の
貧富の差はどうして
広がっていくのだろう？

最近よく聞く
フェアトレードって、
いったい何だろう？

社会のために。世界のために。何かをしたいと思っているあなた



貿易ゲームを体感する参加者

9月19日、地球市民かながわプラザで、フェアトレード講座を開催しました。国際協力やフェアトレードについて多くの人に知っていただくために、「貿易ゲーム」と「講演」の二部構成で行いました。

貿易ゲーム

貿易ゲームは、貿易システムと国々の貧富の差を理解するために考案されたゲームです。参加者は数グループに分かれ、配られた道具を使って物を作りお金にしていきます。今回は、神奈川県国際交流協会の方の協力で賑やかにゲームは進められました。

道具はあるのに材料がなくて作業に取り掛かれず途方にくれるグループ、道具も材料も豊富でおまけに役立つ情報ももらってどんどん金額を上げていくグループ、...たかがゲームと思っていても、だんだん皆夢中になってきます。終了後、各グループから感想を出し合いました。道具も材料もなく苦労した自分のグループがどんな国を象徴していたのか、悔しい思いと共に理解されたようです。

解説と講演

第2部は、ネパールで女性たちのためにコットン・クラフトという工房を運営するサラダ・ラジカルニカルさんが、ネパールでの実践、女性たちの状況を話しました。

「ネパールは産業が少ないため、仕事がなく、特に女性は地方でも都会でも、経済的社会的に厳しい状況にあります。夫の赴任で12年以上地方の山岳地帯に暮らすうち、そうした女性たちに就業の支援をしたいと心に秘めるようになり、1993年カトマンズに戻ったのを機に、小さな工房をはじめました。

**貿易ゲームで体感し、現場の声を聞いて、
あなたの疑問へのヒントをつかんだら、
あとはあなたの行動あるのみ。
堅く考えず、身近なことから始めましょう。**

しかし、製品や品質管理、マーケティングの知識がなかったため、なかなかうまく行きませんでした。ネパール女性起業家協会(WEAN)のを知り、技術向上、価格設定、包装、草木染めなど有効な研修を受け、質を上げることができましたが、それでも市場を確保するのは困難でした。

1996年にネパリ・バザールに出会い、私たちの製品が日本で売れるだろうと言われ、本当に嬉しくて、いっそうの努力をしました。日本での注文が次第に増え、工房で働く貧しい女性たちの経済状況は好転してきました。女性は就業の問題を抱えていますが、仕事を見つけ、技術を向上させても、家事との両立という問題に行き当たります。ネパール女性は、家族の世話を最優先させなければなりません。また、数多くの祭で宴会の準備をするのは女性たちです。好条件の注文があっても、祭のために応じられないという問題がでてくるのです。しかし、働く女性たちとの協力関係とオーダーをするネパリ・バザールが理解をしてくれていることで、スムーズに



懇親会でサラダさんを囲んで

運営がされているのです。この工房は、利益のためではなく、貧しい女性たちへの社会活動として始めました。しかし、苦勞して育てた果物は甘いものです。この仕事のおかげで、私は国内外の多くの人に会うことができました。家にいて、家族や親戚の中だけで暮らしていたら、ありえないことでした。私がやってきたことは、開かれた世界へのまさに第1歩なのです。」



上：ミシンかけをする女性
右：スリッパを作る女性

【コットン・クラフト】

ネパール人女性サラダ・ラジカルニカルさんが1993年に始めた木綿やヘンプ(麻)の小物を作る工房です。就業の機会の少ない女性たちに職場を作りたいと、自宅の庭に作業場を作りました。学校で縫製を学んだ女性達がさらに技術を磨き、丁寧に仕事をこなしています。サラダさんは、彼女たちに仕事を教える傍ら、市場確保のため営業や商品開発にも力を入れています。



新人紹介 福井千陽

人種・文化のつぼニューヨークを放浪していたころがあります。ただひたすら、ギャラリーやら、シアターや

らにはまり込んでいたのですが、そこで私が衝撃を受けたのは、文化や芸術よりも、むしろ企業の社会参加・貢献の姿でした。税金対策とは言われますが、美術館を作ったり、ボランティア活動を推進したり、環境問題に取り組んだり。利益を生み出しながら、一方で社会のために活動をする企業の姿。はは～ん。企業とはお金儲けだけではないかのではないかいや、むしろ企業が率先して動かないかん社会的義務があるんじゃないかなろうかと。市民活動も大切だけど、企業の力をもっと活かせればいいんじゃないかな？などと思ったのです。

コンサルティング会社に勤め、様々な企業に企画提案をする際、企業メセナの意義と必要性を訴えようと試みました。しかし、バブルがはじけ広告費はカット。社会的事業なんて余裕無い！状態。そりゃあ会社が存続しなければ社会事業も成立しないわけで、仕方が無いことだと思ったのですが、欧米企業の動きを知れば知るほど、なんでかなあ。社会づくりって何なんだろうなあ？日本って？と思うばかりでした。

その後、また放浪を続ける中で、フェアトレ

ードの考えにぶつかりました。アフリカでのことです。小学生ぐらいの男の子が、自分で造った石像を売りに来ました。必要ではなかったので断ったのですが、後から考え、もし私が買っていれば、彼の生活の足しになったのかもしれない。ただ手を出してお金頂戴。何か頂戴!!と言われることに抵抗はあるけれど、車を磨く。靴を磨く。何か作って売る。彼らの一生懸命の労働を、きちんと評価することができれば、それは彼らの生活の支えになるんだと。

フェアトレードにも色々な考え方があるようです。私はまだ勉強中ですが、何が現地の人々の為に、社会の為に出来ることなのか。そのポイントに眼を据えて行動して行きたいと思います。社会参加する仕事。ネパールのバザールでは、身体に障害を持つ方の施設とも協力しています。素敵なことだと思います。自分の利益だけでない生き方。出来たらいいなあと思っています。よろしくお願いします。



フェアトレードのお店

ベルダは楽しいイベントが満載です!!

ベルダでは、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介しますために、様々なイベントを行なっています。

「横浜国際協力まつり'99」

日時: 10月30日(土)・31日(日)

場所: 産業貿易センター 1階ホール

「ネパール料理教室」

日時: 12月12日(日)

場所: あ～すぶらざ料理教室

「一般公開イベント(アロー紹介)」

藤谷写真展 2月16-20日

公開講座(Mr. S. Shahi)2月18-19日(金/土)

場所: あ～すぶらざ、リリース

「フェアトレード学習会」

「ベルダ」では、易しい勉強会を連続で行ない気軽に参加出来るものを予定しています。
みなさまの参加をお待ちしています!

10月23日(土)ホームの子ども達

11月28日(日)サラダさん座談会

1月22日(土)無農薬紅茶

2月20日(日)MAHAGUTHIの活動

至大船

至横浜

本郷台駅

地球市民かながわ
プラザ2F
フェアトレードの
お店 ベルダ

あ～すぶらざ
(愛称)

TEL: 045-890-1447
FAX: 045-890-1448

卸も全国的にしています!
お問合せ下さい・B



国際理解にお役立て下さい。通信販売カタログ

ネパリ・バザー口では、ニュースレターの発行、フェアトレード関連の本の出版、市民の方々の国際交流、支援の理解を深める活動も行っています。また、フェアトレードの活動に広くご協力頂けるように、通信販売カタログを作成していますので、ご興味がある方はご請求下さい。

学校、教育機関へのフェアトレード商品の貸し出し、講演会、お話会など、開発教育のご協力も実施しています。お問合せ下さい。



ボランティア募集!

イベントのボランティアをはじめ、様々なボランティアを募集しています。お気軽にお問い合わせください。

ネパリ・バザー口のホームページ・・・グループの設立からフェアトレードに関する情報紹介など分かり易く読めます。ご覧になってご意見をメールでどうぞ!

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo>

<編集後記>



貧困・人権・教育・フェアトレード・協力・支援・・・考え出すと終わりの無い問いになりそうの中で、ゆっくりでも一歩ずつ進みたい、そんな想いが私を支えているのか?と自問するこの頃です。(昌治)



ネパールで支援先の子ども達に会ってきました。すっかり背の高くなった男の子たち、仕事に就き、結婚し巣立っていく年長の子達・・・支援を始めて8年。年月の流れを感じます。(早苗)



ここ1年の私達のテーマは、一人一人の幸せを願って。ここ数年のフェアトレードの動きは、ネットワーク化。どれも難しいですが、平凡な人間らしさ、生活感覚、思いやりの心を大切に進んで行きたいと思います。(完二)



日頃何気なく飲み親しんでいる紅茶ですが、歴史や葉の種類などを知るうちに、人々の、お茶に対する愛情の深さを知りました。ゆったりとお茶を楽しむ時間、大切にしたいですね。(洋子)

発行所: ベルダ レルネーヨ
ネパリ・バザー口

247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町 274-15
第2中山ビル 3階

Tel: 045(891)9939 Fax: 045(893)8254

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo>

E-mail: ngo@yk.rim.or.jp

1999年10月発行

編集責任者: 太田昌治

編集担当者: 土屋完二 魚谷早苗

春山洋子

編集協力者: 他スタッフ一同